2023年度

愛 知 の 特 別 支 援 教 育

（第52集）

もくじ

Ⅰ　はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２

Ⅱ　授業実践
　小学校・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３
　中学校・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・４

Ⅲ　第73次教育研究活動のまとめ
　１　学習指導をどうすすめるか・・・・・・・・・・・・・・・・・５
　２　人とかかわる力を育てるための指導・・・・・・・・・・・・６
　３　特別支援教育をどうすすめるか・・・・・・・・・・・・・・８
　４　助言・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・９
　５　まとめと今後の課題・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１１

愛知教職員組合連合会　教育課程研究委員会特別支援教育部会

2023年度　　教育課程研究委員

ブロック推薦　　◎部長　○副部長

名古屋			尾張			三河		
氏　名	単組	分会	氏　名	単組	分会	氏　名	単組	分会
○田中　洋樹	名古屋	天白特別支援	佐藤　清則	一宮	三条小	今泉　真則	新城	鳳来中部小
森　はるか	名古屋	有松小	湯浅　直子	尾北	岩倉南小	松田　優佳	岡崎	美川中

第69～72次教育研究全国集会リポート提出者

69次			72次		
氏　名	単組	分会	氏　名	単組	分会
◎田口　孝典	海部	永和小	○近藤　奈歩	名古屋	西特別支援

第73次教育研究全国集会リポート提出者　　原　暁良（名古屋・矢田中）

Ⅰ　はじめに

地域や学校などにおける障害のある子どもたちをめぐる動向は、本人や保護者の教育に対するニーズの高まり、卒業後の進路の多様化、インクルージョンやダイバーシティの理念の浸透などがみられるところである。すべての人が生活しやすい環境をめざす「ユニバーサルデザイン」の考えは、さまざまなところにいかされるようになり、障害がある、ないにかかわらず、すべての子どもたちに適切な支援をすることの重要性が理解されるようになってきた。そのため、支援を必要とする子どもたちのニーズを把握し、学校・家庭・地域が連携して支援を行っていくことが強く求められている。

特別支援教育部会では、これまでもさまざまな状況におかれている子どもたちに対して、一人ひとりのゆたかな学びのために、どのように教育課程を編成していけばよいか検討を重ねてきた。特別支援教育における「基礎・基本」は「生活する力・生きる力」そのものである。さらに、子どもたちの主体性や創造性を育てながら、体験や知識をもとに自ら判断し行動できる力を「生きてはたらく力」ととらえ研究をすすめてきた。

本年度の研究においても、子どもの教育的ニーズを的確に把握し、学習意欲を高めるような学習活動や教材の工夫をした実践、人とかかわる力やコミュニケーション能力を高める実践、校内での特別支援教育推進のためのとりくみや発達障害通級指導教室での実践支援などが報告された。

これらの実践で行われたように、子どもたち一人ひとりのもっている能力や個性を最大限に引き出し、学習の成果が生活にいかされていくことで、子どもたちの自信を高め、自立や社会参加の基礎を育てることができると考える。

そして、人とかかわる活動や作業的・体験的な活動を多く取り入れて学習にとりくむ中で「生きてはたらく力」を育むにはどうしたらよいか、学習した内容を日常生活にどのようにいかしていくか、教員が子どもたちへの理解を深め、前向きに学んでいけるようにするにはどうしたらよいか、などの観点から教育内容を検討していきたい。

Ⅱ　授業実践

一人ひとりの教育的ニーズに応じた学習支援の充実
―生活単元学習「お手伝い名人になろう」の実践を通して―

岩倉市立岩倉南小学校　湯浅　直子

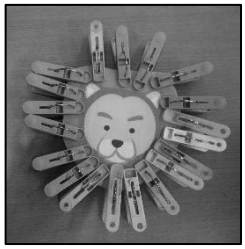
（1）　はじめに

本学級は、１年生２人、４年生１人、５年生２人の児童が在籍している。友だちや教師とのかかわりに積極的で、前向きに学校生活を送っている。しかし、手先の巧緻性に課題があったり、生活経験が乏しかったりすることから、学年相当の生活動作が難しい児童が多い。そこで、「お手伝い」を題材にして、手指の訓練を行ったり、家事スキルを身につけたりできるような実践を行った。

（2）　実践の内容

①　ねらい

「生活の中で活用できるスキルであること」「学年に関係なく仲間と楽しんでとりくむことができること」「継続してとりくむことができること」を念頭に置いて、毎月１つの課題を設定した。また、授業時間に全員でとりくむだけではなく、それぞれの児童が、できる時間に繰り返し練習することができるようにした。



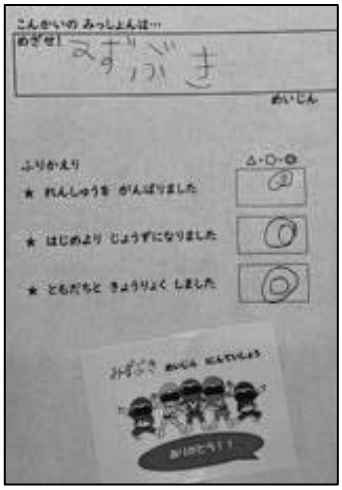
【写真１】

②　授業実践

６月にとりくんだ「みずぶき名人」の授業では、「雑巾を畳んで絞る」「すみずみまで拭く」の練習をした。高学年の児童は、雑巾をまっすぐ干すことも練習し、毎日の清掃活動の後に気を付ける姿がみられた。

【写真２】

７月にとりくんだ「せんたくものほし名人」の授業では、まず、ライオンの顔が描かれた段ボールの周りに洗濯ばさみをつける練習を行った。【写真１】どの児童も集中し、完成させることができた。次に、ハンガーピンチに軍手を干した。干す人、軍手を渡す人のペアになり、協力してとりくむことができた。９月は、運動会の練習で、体操服を使う日が多かったので、自分の体操服を学校の洗濯機で洗ってハンガーに干した。【写真２】授業の振り返りは、毎回同じ様式の振り返りシートを用いた。【写真３】〇を書き込む簡単な形にし、最後に名人認定証を貼った。



【写真３】

（3）　成果と課題

児童は、お手伝いによいイメージをもっており、意欲的に活動することができた。授業で、１つの動作にじっくりとりくませることで、それぞれの児童の達成度に合わせて指導をすることができ、スキルの獲得につながった。また、お互いにがんばっている姿を見て、励ましたり、一緒に完成を喜んだりという自然なかかわりがうまれた。１年生の児童は、脱いだ服を畳む習慣がなかったが、干した体操服を畳んでからしまうことを繰り返すことで、体育の授業の後などに、自わから服を畳む姿がみられるようになった。しかし、家事動作は、簡単そうなことでも複数の動作が同時に行われており、本学級の児童にとっては、難しいことがわかった。シンプルに伝える、スモールステップでとりくませる、適切な道具を用意するなど、てだての工夫が必要である。家事の練習は、どの学年でも必要なものだと思う。今後も楽しく、継続して行うことのできる課題を工夫していきたい。

自分と相手のよさを認め合い、他者とのよりよい関係を築こうとする生徒の育成
－特別支援学級における道徳　生徒の実態に合わせた指導の工夫を通して－

岡崎市立美川中学校　松田　優佳

（１）　はじめに

本実践は２年生知的障害３人、情緒障害４人、３年生知的障害３人、情緒障害１人、計 11 人の生徒を対象に行った。生徒のなかには、登校を渋る生徒や、通常の学級から支援学級に体験に来ている生徒もおり、障害の種類のみならず、さまざまな生徒がいる。２年生と３年生は学級や道徳の授業など一緒に過ごす時間も多くあり、和気あいあいと過ごす姿があるが、自分本位な思いやりに欠ける言動で相手を傷つけてしまったり、小競り合いに発展したりしてしまうことも少なくない。また、「わからないよ」「自分はどうせできない」などの自己肯定感の低いつぶやきや、相手の行動を告げ口し自分の行動を正当化しようとする言動も目立つ。そんな彼らにとって、いかにしてよりよい人間関係を築いていくかということは、とても大切な課題であると思い、実践を行った。

（２）　実践の内容

（ア）　生徒の実態に合わせた教材や授業スタイルの工夫

全員が最後まで興味をもち考えることができる教材を選択した。また、生徒たちが興味を示し、集中して聞くことができるように紙芝居を取り入れた。実態に応じて内容把握が難しい生徒がいる場合は、個に応じたワークシートを用意したことで、ねらいとする道徳的価値にそれぞれが迫ることができた。

【写真１】「スマイルタイム」のルール

（イ）　自分の気持ちを相手に伝えるための工夫

授業展開のなかに、意図的に交流する場として「スマイルタイム」を設定した。この時間は安心して交流する時間とするために、あらかじめルールや交流の型を示した。【写真１】また、「スマイルタイム」で相手に自分の気持ちを伝えやすくするために、付箋を使用した。付箋にあらかじめ自分の考えを書き、交流の際、その付箋を渡すことで「スマイルタイム」の活性化を図った。【写真２】自分のワークシートに級友からの付箋がたくさん集まると笑顔になる生徒やうれしくて涙を流す生徒もいた。

【写真２】「スマイルタイム」での交流の様子

（３）　成果と課題

「失敗しても大丈夫だよ」と、ある生徒は体育時の試合でバッティングを失敗した生徒に言った。他の生徒も失敗した生徒を責めることなく、アドバイスをしたり一緒に練習をしたりしている。

今回の実践を通して、日々生徒たちの心が成長していることを実感する。自分の意見を安心して言える場を意図的に作る「スマイルタイム」は、とても有効であったと考える。また、ねらいとする道徳的価値にそれぞれが迫るためには、個に合わせた対応として、紙芝居やワークシートも有効であったと言える。さらに、それぞれの特性をもつ生徒たちがいる特別支援学級では、授業の中で土台をそろえることが大切であることがわかった。今後も生徒の実態把握を適切に行い、生徒たちが自分と相手のよさを認め合うことができるような授業を実践していきたい。

Ⅲ　第 73 次教育研究活動のまとめ

1　学習指導をどうすすめるか

（1）　各研究活動の傾向

一宮は、「どの児童もわかりやすい、生活に生かせる道徳の教材や指導」というテーマでの研究であった。児童の障害特性や発達段階、生活年齢に合わせて、「生活に結びついた内容」を「具体的な活動を通して」行う教材を開発したり、指導を紹介したりすることで、子どもたち一人ひとりの意欲を大切にし、学ぶ喜び・わかる楽しさを保障する教育課程の編成につながるという考えからテーマが設定されていた。具体的には友だちのじょうずなことを考えながら自分のじょうずなところをたくさん考える授業の実践が発表された。ハートの色や大きさでそれぞれの気持ちの変化を表すようにすることで、児童が自分を好きだと思う気持ちが高まったことがわかったという実践の様子が報告された。その他にも一宮市の特別支援学級の担任から寄せられた実践がレポートには紹介されていた。

研究の結果として、振り返りを工夫することで、よりよく生きようとする児童の気持ちが高まったことや、表情チップや気持ちのカードなどを併用することで、気持ちを考えやすくなり、理解が深まったことが報告された。また、役割演技や実際に活動を取り入れることも効果的であったとのことだった。

尾北は、「生活上の困難さを改善する自立活動の実践的研究」というテーマでの研究で、自分の苦手を認識して、改善・克服にむけて行動していくことができるよう実践が進められていた。自分の気持ちを伝えることが苦手な生徒は、「気持ちツリー」を作って、たくさんの気持ちがあることや、表現するための言葉を知り、自分の気持ちを表現しやすくしていた。相手の気持ちを考えるとりくみとして、ゲームを通して、声のトーンや表情、身振り手振りなどの情報を整理して、相手をよく観察することや、しっかりと考えを聞くことが必要であることを学ぶようにしていた。また、物事の判断が苦手な生徒には、選択肢を与えて自分で判断する経験を積むことで自信をもつことができるようにする活動にとりくませていた。結果として苦手感や困り感を他の生徒ももっていることを感じて積極的に友だちと協力して活動しようとする姿がみられたこと、身近な教材や資料提示によって前向きに授業にのぞむことができたことが報告された。

また、「児童の特性や教育的ニーズに合わせた国語科指導」というテーマで、国語科教育の中で個別の指導と全体への指導を組み合わせた実践の報告もあった。実践授業では、ひらがなのサイコロやことばシートなどの教材を工夫し、児童の実態から浮彫りにした課題に合わせた個別の学習指導を進めた結果、それぞれの文章を書く力が高まったとのことだった。そして、個別の学習の後、全体で行った、絵カードを説明するクイズ形式のとりくみでは、成果を全体の前で発表したことで、児童が以前より堂々とよりよい内容の文で発表することができたと報告された。

豊橋は、「思いを通わせて得る喜びと自信をもとに学び続ける子どもの育成」というテーマで生活単元学習での研究にとりくんだ。自分たちで育てた野菜を収穫し、販売する「くすくすマート」の実践が報告された。お客さんに喜ばれることをテーマに友だちと話し合ったり、アンケートをとったりしながら、活動にとりくむ様子が報告された。商品を決めたり、商品の作り方を調べたりする学習や、必要な物を電話で注文する練習を行い、課題解決にむけて学習活動にとりくむことができていた。話し合いを繰り返し行ったことで、自分の意見をもち、自信をもって友だちに伝え、学び続けることができたことや、アンケートの活動にとりくむことで、人の思いは違っていてそれぞれに理由があることを知ることができたことが成果として報告された。

岡崎は、「日本の伝統的な遊びを通じ、友だちとのかかわりを深めることができる子ど

もの育成」というテーマでの生活単元学習における研究が報告された。「遊びの面白さを知り、友だちと楽しくとりくむことができる子ども」「友だちがうれしくなるような言葉で伝えることができる子ども」の育成をめざしてとりくまれていた。実践では、オリジナルの福笑いを作り、友だちと一緒に行う活動にとりくまれていた。自分が描いた絵を福笑いとして遊ぶことで意欲を高めることができたこと、友だちと福笑いを行う場を設定してとりくませたことで、子どもどうしの会話が増え、友だちと協力したり、励ましたりする声掛けをする様子がみられたことが報告された。

また、「自分の思いや考えを相手にわかりやすく伝わるように表現できる生徒の育成」をテーマにした国語科の研究もあった。単語や文節の並べ替えによる文の組み立ての学習や、身近な題材を設定し、話型を示して具体的に文章を書く練習にとりくまれていた。文章を書く際に出来事を思い返すときには、当日の写真や動画を提示してさまざまな観点から振り返ることができるようにしていた。さらに、指定された５つの言葉を使って物語を作る、「物語作り」の学習を継続的に行い、文章を書くことに慣れるようにしていた。助詞や単語を並べ替えたり、言葉を分類したりする学習が、助詞の使い方や単語のつながりを意識する上で有効であったとのことだった。また、話型をもとに文章を書くことが、わかりやすくまとまりのある文章を書くという点や自信をもって表現するという点において有効であったことが報告された。

刈谷は、「見通しを立て、目的意識をもつことで、意欲を高め、よりよく学ぶ子の育成」というテーマで、総合的な学習の時間・生活科の時間で野菜の生産・販売活動にとりくんだ実践の発表であった。実践では、自分たちで育てた野菜を収穫、販売し、喜んでもらう体験、働くことでお金を得たり、自分たちのために使ったりする体験をすることで意欲的にとりくむことができるようにしていた。また、売り上げたお金の金額で、どのような物を買うか、どこへ行くことができるかなどを子どもどうしで相談する活動を取り入れ、お金に関する知識を深めたり、友だちと認め合って成長したりすることができるようにしていた。見通しが立つようにしたことで、これまでやりたがらなかった活動に意欲的にとりくむことができ、楽しんでいた様子もみられたと報告された。

（２） 討論の中心

各レポートの提案の後、児童生徒の自己肯定感を高めるためにどのような指導や支援を行っているかについて意見が交わされた。まずは、保護者との連携を大切にしているという話が出た。面談をする中で育ってきた環境や家庭での様子を把握して指導の計画を考えるようにしているといった意見や、学校でのよい姿はすぐに保護者に伝えるようにして、保護者の方からも褒めてもらえるようにしているという話が出された。また、保護者だけではなく、教員の理解や連携も大切になるという意見が出た。できる限り多くの教員にかかわってもらう中で、認めてもらう経験を積むようにしているという話が聞かれた。そのためにも、周りの教員の理解を促す必要があり、できる限り多くの情報を提供し児童生徒に関して共通理解をはかることができるようにしているという話がいくつか出された。また、「成功体験と繰り返し」がキーワードになるのではないかという意見も出された。児童生徒自身が課題をやり遂げたという実感をもち、成功体験を積む工夫や、友だちどうしのかかわりの中でも認め合って自己肯定感を高めることができるような活動の工夫をしているといった意見も出された。

２　人とかかわる力を育てるための指導

（１） 各研究活動の傾向

名古屋は、「他者とかかわり合い、目標に向かって自分の役割を果たすことができる生徒の育成～社会情動的スキルの向上を通して～」をテーマに中学部における総合的な学

習の実践を行った。困ったときに相手に困っていることを伝えられなかったり、相手の気を引くために不適切な行動をしてしまったりする生徒に対し、「相手とかかわり合う経験が少ないこと」が最も大きな要因であると考えた。そこで、多くの人とかかわる経験やかかわろうとする自信を得るために、校外に出て地域の方々とかかわることが有効なてだてになるのではという仮説をたて、多肉植物の鉢植えを作り、地域の方々と交流するという実践を行った。その際、「感情のコントロール」「他者との協働」「目標の達成」の３観点からみる「社会情動的スキルチャート」を分析した上で、生徒の実態に合わせて役割を設定したり、学習場面を設定したりすることで、成功体験を積み重ねることができた。この変容から、地域の就労継続支援Ｂ型事業所や地域の商業施設の方とかかわり合いを重ねていくことで、他者への呼びかけが増えたり、不適切な行動が減ったりするなど社会情動的スキルを効果的に高めることができ、日常生活にもよい影響をもたらすことができたと報告された。

一宮は、「クラスで気になる生徒とのかかわり方～児童・生徒理解の観点から～」をテーマに日常生活の中での実践を行った。ある生徒は、級友との関係は悪くないが自わから話しかけられず、交流学級でも受動的な様子であった。また、突然笑いだす、問いかけに応じられないなどのコミュニケーション面における課題があった。その生徒の夢を実現させるために、行動を改善させる手法を考えて指導すれば、より自己実現をめざす生徒を育成できるだろうとの仮説をたて、３つのてだてにとりくんだ。①生徒の自分の感情を自己表現するためにハンドサインを用いて表現を促す方法、②返事の仕方がわからない時に具体的な言葉を教えて適切な応答を真似させるおうむ返し手法、③おすすめの新聞記事を教員にすすめる伝達話法、のてだてを行った。生徒は、自わから話しかけることが少なく、相手に話を伝えることができなかったが、実践によって、だんだんとコミュニケーションがとれるようになってきて、教員や級友とも楽しそうに話をする姿が多くなってきたと報告された。

豊田は、「自わから話しかけ、話す楽しさを感じられる生徒の育成―個別最適な学びと協働的な学びを生かした会話活動を通して―」をテーマに、自立活動での実践を行った。相手に自分の気持ちを伝えられないことでコミュニケーションにも受け身的で自分の主張や思いを相手に伝える力が弱いという課題をもつ生徒がいる。そこで、聞き名人質問名人を中心としたスキルトレーニングを行ったり、「こんなときどうする？」カードを活用したりして、どのような会話をすればよいかを考えるとりくみをした。リアクションカードを提示して、「いいね。」「へえー。」などの言葉を選んで具体的なリアクションの仕方を練習したり、質問を考えたりする練習を重ねた。また、生活の中でおこるトラブルに対して適切な行動を考え、言葉かけをする練習にもとりくんだ。「雑談力をつけよう」と通常の学級の仲間と話す機会を設定したり、先生にインタビューしたりするなどの活動を実践した。以上のことを実践したことで、会話を自わから始めることができるようになり、自信をもって会話を進めることができるようになったと報告された。

蒲郡は、「個の特性を生かし、身近な人とのかかわりを楽しむ子の育成～自立活動「聞けた　言えた　伝えた　おもてなし大作戦」の実践から～」をテーマに自立活動での実践を行った。子どもたちのやってみたいを引き出すために、ふだんからかかわっている中学校区の特別支援学級の児童生徒と「ふれあいパーティー」を計画した。ステップ１からステップ４まで自信につながるステップアップした繰り返し活動を設定した。ハプニングに対する対応法も練習した。意図的に編成したグループの中で、自分のやってみたいことを話しあって「魚すくい」「フォトスタジオ」「まとあて」「くじびき」の４つのワークショップを行った。それぞれ自分の得意不得意をふまえ、自分にはどんな役割ができるかを考えて活動した。練習から本番まで、何度も同じ流れを練習することで、改善点がみつかったり、慣れてきたりして自信をもって人とかかわる姿につなげることができた。個の実態に合わせて仕事内容やタイミングをわかりやすくした学習カードの活用をした。また、「おもてなし大作戦」として活動をステップアップしたことで、子どもたちに安心感や達成感を与え、身近な人とのかかわりを以前よりも楽しむとともに、かかわる相手を広げることができたと報告された。

（２） 討論の中心

各リポートの提案をうけ、まず、人とかかわる力を育てる場の設定について意見が交わされた。地域との関係、教員との関係、中学校区での交流などにおいて、さまざまな実践が報告された。例えば、通級指導の中では、少人数のグループの中で同じような興味関心をもつ児童どうしをつなげたり、あえて違う興味をもつかかわりの少ない子どうしをつなげたりするなど、児童どうしの関係を調整する工夫や、ふだんかかわりの少ない先生とのかかわりを増やすために、特別支援学級の季節の行事を利用して他の先生に参加してもらう実践もみられた。例えば節分のオニ役に校長先生を呼ぶなどして交流する機会を設定しているとのことだった。また授業中の工夫としては、「ゆうびんやさんごっこ」などで役割を作り、ローテーションをして、子どもどうしがかかわらざるを得ない活動を設定している工夫も報告された。さらに中学校区での実践では、小・中の保護者どうしが交流できる場を設定する試みや、保育園でのハンドベル演奏を通して、異年齢集団とのかかわりを増やす実践を行っている報告もあった。

次に、人とのかかわり方を高めるスキルについて意見が交わされた。楽しい活動をする中で、子どものよかった点を評価してフィードバックすることを心がけている、休み時間に、すごろくや鬼ごっこなどの遊びを教員も一緒にする中で、問題解決の方法を学べるように配慮しながらの実践も報告された。

３　特別支援教育をどうすすめるか

（１） 各研究活動の傾向

名古屋は、「自分に自信をもち、主体的に物事にとりくむ生徒の育成～グループ通級の活動を通して～」というテーマでの研究であった。通級指導教室に通う生徒の中の希望者が参加する「グループ通級」という活動を行い、その中で、安心して挑戦することのできる場や、成功体験を実感できる振り返りの工夫をすることで、自己効力感を高め、自分に自信をもって積極的に活動にとりくめるのではないか、という考えのもと研究はすすめられた。発表の中では、生徒２人にグループ通級で行うゲームの計画や司会・進行といった役割を与えたことや、ブレインストーミングを意識したミニ会議をさせたこと、明確な目標をもたせたことで、最後までゲームの司会・進行をしたり、自分たちで話し合ってゲームを計画したりと進んで活動にとりくむことができたと報告された。また、ゲームに参加した他の生徒の感想が書かれた付箋を振り返りシートに貼らせたことや、活動の様子が撮影された動画を視聴させ、キャリアナビゲーターからもよかったところを伝えてもらったことで、達成感を味わい、新たな活動にも挑戦しようとする姿があったと報告された。

愛知は、「中学校の通級指導教室の役割とは～生徒の学習意欲を下げないために～」というテーマでの研究であった。生徒の特性に合わせた活動を中心に達成感を積み上げさせることや学級との連携を密にすることで、通級指導教室に通う生徒が、自分なりの学習方法をつかみ、穏やかに過ごすことができるのではないか、という考えのもと研究がすすめられた。発表では、ディアボロやバドミントン、電動ろくろの体験など、生徒の興味関心の高い活動を用意し、生徒が自分で活動内容を決めてとりくむ時間を設定したことで、友だちと活動にとりくむ楽しさや挑戦する楽しさを感じ、内発的意欲を高めることができたと報告された。また、コグトレ棒や数字読み取りプリント、ジオボードといった教具を用意し、活動にとりくませたことで、生徒の読み方や見え方などをアセスメントすることができ、生徒一人ひとりへの合理的配慮を教科担任に報告し提案することにつながった。そして、問題を厳選した「半分ノート」という計算問題集や、問題集の文字や図を拡大した課題プリントなどを用意したことで、生徒は、提出課題にもとりくみ、担任からの助言や支援を受け、学習を自分なりにすすめていけるようになったと報告があった。

西尾は、「『やりたい！』と授業にのぞむ子の育成～特別支援学級（自閉・情緒）国語科『いろいろなふね』の実践を通して～」というテーマでの研究であった。子どもの困り感に寄り添った授業展開や、子どもの興味にもとづいた教材、教具、場の工夫をすることで、授業の展開を見通し、情緒的に安定したり、「やりたい！」と意欲的になったりして授業にとりくむことができるのではないか、という考えのもと研究がすすめられた。発

表では、国語ノートのマスの大きさで記入でき、記入する内容ごとに色分けして線の引かれた枠のあるワークシートを用意したことで、Aは、「できそうだな」と先を見通すことができ、安心してワークシートにとりくむことができたと報告があった。また、Aの好きなカードゲームや乗り物、映像を教材化し、それぞれの乗り物について学習した内容とともに、その内容に合ったカードの効果を考えて記入するオリジナルカードを作成させたり、船の映像資料を視聴させたりしたことで、Aは、「国語の授業を早くやりたい」と言って、意欲的に授業にとりくむ姿がみられたと報告があった。

（２） 討論の中心

各レポートの発表を受け、特別支援教育をどうすすめるかというテーマで意見を述べる中で、「インクルーシブ教育をどのように校内ですすめているのか」について討論をすすめた。特別支援学級の子どもと教員が通常の学級とつながり、教員全体で子ども理解を行っていくために各学校で大切にしていることについて、多くの教員で意見が交わされた。

特別支援学級を担任している教員からは、授業の担当教員にその子に合った合理的配慮を提案したり、通常の学級の授業予定を教員どうしで確認して子どもへの事前指導を考えたり、空き時間を活用して通常の学級に参加し、子どもたちの困り感を担任に伝えたりしており、互いに子どもの実態やてだてについて共有することが大切だという意見が出された。また、担任だけでなく、通常の学級の子どもたちにも、学年集会などで特別支援学級に在籍している子どもの実態を伝える場を設けており、通常の学級の子どもたちにもかかわり方などを考えさせるきっかけをつくることを大切にしているという意見もあった。さらに、月に１回、教員全体で子どもの情報交換を行い、支援内容を共有する時間を設けており、さまざまな場面で教員から声をかけられたり、あいさつをされたりする子どもが増え、教員全体で子どもを見守ることができるようになっているという意見も出された。

通級指導教室を担当している教員からは、多くの子どもとかかわる機会があり、それだけ多くの子どもの情報をもっている通級指導教室の担当教員だからこそ、特別支援学級担任と通常の学級担任とのつなぎ役になり、教員間の風通しをよくする役目があるという意見が出た。また、担任の教員は時間がなく忙しいため、口頭での子どもの情報共有ができないときもあり、「連携シート」というファイルを作成し、そのシートに互いにコメントを記入し情報を共有しているという報告もあった。その他、特別支援学校の教員からアドバイスをもらい、子どものアセスメントを行ったりてだてを考えたりする専門家チームを校内に設置しており、さまざまな視点から子どもの実態を把握できているという意見も出された。

４　助言

愛知県医療療育総合センター中央病院の杉山由佳さんは、「学習指導をどのようにすすめるか」で重要なことは、「子どもに興味をどのようにもたせるか」だと述べられた。興味がもてないとパフォーマンスは下がる。このことは、障害の有無にかかわらずどの子どもにも当てはまる。しかし、その中でも、特に発達障害がある子どもはそれが顕著に出やすい。本日発表された実践は、学習に「楽しみ」が含まれているものが多く、とてもよいとりくみである。また、「あれもできるように、これもできるように」と思い過ぎると、嫌な活動にもとりくませる機会が増えてしまう。これは、子どものモチベーションを下げ、その結果、練習の機会が減り、習得が遅れるといった悪循環に陥りやすい。そのため、「できるようになってほしい」ことは、子どもが好きになれるような工夫をしていく事が大切である。本日の発表の中でも、国語や算数に子どもたちの興味がむくような工夫がたくさんあり、改めて教員の引き出しの多さを感じた。自己肯定感を高めるためのとりくみについては、自分のよい所や苦手な所を理解し、苦手な所はこういう支援があれば、こういう工夫があれば乗り越えられる、やれるという安心感をもち、「自分っていいな」と思えることが自己肯定感の高まりにつながっていくと考える。それは、これにとりくめば得られるといった一時的なものではなく、日々認められている、受け入れられているという積み重ねが大切である。けれど、日々認める、受け入れるということは、教員が意識していないと見逃してしまう。しかし、先生方は本当によく気付いて、具体的に「ここいいね。」「ここもいいね。」と認めてくださっている姿を、本日知ることができてよかった。子どものいい面が増えてくる環境のセッティングがあってこそ、褒める機会も増えるため、先生方の子

どもの実態把握をふまえた環境のセッティングのすばらしさを知ることができてよかった。
　人とかかわる力を育むためには、学習指導と同様に、人との交流を好きになることが何よりも大切である。通常の学級などで「ただ一緒にいればよい」ではなく、子どものコミュニケーション能力の段階などを考え、その状況に合った適切な環境を整えることが、よりよい体験につながる。人とかかわる力を育むために、ソーシャルスキルトレーニングを取り入れるのもよい。しかし、学習ではできるが、日常生活になると学んだことが発揮しにくいといったことがある。そのため、日常に即した実践的な内容や、遊びの中で自然に身につくような工夫をすることが大切である。
　「特別支援教育をどうすすめるか」では、今は過渡期であり、通常の学級でも困り感のある子どもはたくさんいるところがクローズアップされている。学校によって生じる支援の差を小さくするために、引き続き、学校間、教員間の密な連携を図っていく必要がある。

　名古屋市立南特別支援学校分校の久賀弘太郎さんから、分科会の中心テーマである「豊かに生きるための力を育む」ことをふまえながら、「学習指導をどのようにすすめるか」「人とかかわる力を育てるための指導」「特別支援教育をどうすすめるか」の討論の三本の柱に沿って総括があった。
　まず、「学習指導をどのようにすすめるか」については、子どもが授業の中で「ねらい」をつかんでいるかが大切であると述べられた。授業の最初にねらいをつかませ、終わりにはねらいが達成できたか振り返らせる。「楽しかった」ではなく、「何ができるようになったのか」を、子どもが意識できるようにすることが大切である。また、教科領域を合わせた指導については、何の教科のどの単元どうしを合わせているのか、授業者である教員は知っていなければいけない。また、どの場面のどのような子どもの姿から、教科ごとの評価をとるのかを明確にしておく必要がある。自立活動は、各教科の中でも指導することが学習指導要領にも示されている。ただし、自立活動のコミュニケーションの指導なのか、国語科の「聞く・話す」の指導なのか、整理しておくことが大切である。道徳科においても、道徳的心情を育てることが目標であるのに対し、自立活動は、「障害による学習上又は生活上の困難を主体的に改善・克服するために必要な知識、技能、態度及び習慣を養うこと」が目標である。例えば、「きちんとあいさつができる」という行動を評価するのは自立活動であり、「あいさつをすると気持ちがいい」という気持ちをもつことができたことを評価するのが道徳科と言える。最近、「イエナプラン」や「自由進度学習」という言葉を聞くようになってきた。これは、今の授業を全く別の形に変えることではなく、よりよい学習を実現させるには、そこにどんなヒントがあるかを考えるとよい。一人ひとり違うから、別々に学習するだけではなく、違うからこそ、みんなで力を合わせたり教え合ったりして学習することはできると考える。
　次に、「人とかかわる力を育てるための指導」については、本日の発表をうかがい、その子どもに合った「スモールステップ」を設定することがいかに大切かを、改めて感じた。練習することで成功につなげる、何度も繰り返すことで自信につなげる、小さな集団からはじめ、徐々に大きな集団へ場面を変えていく、まさにその通りだと考える。これは、障害の有無や年齢に関係がない。本日の発表にあった、「好き」や「得意」を生かす指導を通して、苦手なことでも、「これならできる」という自分の方法を見つけられるとよい。そして、特別支援学級のよさは、通常の学級と交流できることである。私が、特別支援学級の担任をしていていたときには、よく教室に通常の学級の子どもたちを招いていた。特別支援学級の中だと子どもたちはリラックスして素の姿を出しやすくなるため、通常の学級の子どもたちに、「〇〇さん、こんなことできるの」とたくさん認めてもらうことができる。環境によって、子どもたちのできることとできないことが違うため、工夫されるとよい。教材・教具、そして、アセスメントも大切である。本日の発表の中に、社会情動的スキルに着目し、スキルチャートを活用している実践があったが、教員の主観ではなく、客観的な指標によるアセスメントを行うことで、的確な指導につながるし、評価もとりやすくなると考える。そして、コミュニケーションの土台は何といっても「安心感」である。教員の存在が、子どもにとってゆるぎない安全が保障されている安全基地であるならば、子どもは果敢にチャレンジできる。怖くなったり、失敗したりしても、教員のもとに戻ればよいという安心感があるからである。まずは、教員が子どもの安全基地になること、それが

大切である。

最後に「特別支援教育をどうすすめるか」については、子どもの特性とどう向き合い、付き合っていくのか、それを示していくのが特別支援教育だと考える。その中で、短所と向き合うこともちろん大切なことだが、それだけでは子どもも教員も辛い。これからは多様性の時代。短所をなくすことよりも、長所をのばすことに重点を置いて指導や支援をしていけるとよい。肯定的なかかわりの中で、長所を自覚し、のばし、安心感を得ることで、短所が小さくなっていくこともある。そして、これからは子どもたちが主体的に学びを進めていくことが、求められる。学習指導要領に定められている学ばなければいけないことをどのように学んでいくのか、子ども自身が判断し、学びを進めていく。教員が教えるところ、子どもたちが考えて学びを進めるところをバランスよく設定できるとよい。通級指導教室の重要性も、今後ますます高まっていくことが予想される。最後に、「生徒エイジェンシー」にふれたい。生徒エイジェンシーは、「変化を起こすために、自分で目標を設定し、振り返り、責任をもって行動する能力」と訳される。「社会に適応できるように」指導するのではなく、「自分なら何ができるか」を考えることができるように導いていくことが求められている。私は、これまでの授業を大きく変更する必要はないと考えるが、社会情勢や教育課題は常に変化していて、私たち教員に求められていることも変化している。子どもの見方や、指導や支援に関する意識は時折振り返り、見直していかなければいけない。

５　まとめと今後の課題

子どもたち一人ひとりの実態に合った支援の内容や、指導のあり方についてのリポートが数多く提出された。それらの発表を受け、討論を行った。その結果、教育課程編成の基本的な考え方が明らかになった。

○　児童生徒の自己肯定感を高めるためには、保護者やより多くの教員の間で共通理解をはかることが大切であることが確認された。

○　児童生徒自身が課題をやり終えた実感をもち成功体験を積む工夫や、友だちどうしのかかわりの中でも認め合って自己肯定感高める工夫が大切であることが確認された。

○　人とかかわる力を育てる場の設定をする上で、特別支援学級以外の教員や子どもどうし、異年齢集団など、さまざまな人とかかわりがもてるように授業を工夫することの大切さが確認された。

○　人とのかかわり方を高めるスキルとして、教員が子どものよかった点をフィードバックすることや問題解決の方法を学ぶとりくみをさまざまな活動の中で取り入れることが重要であるという意見が出された。

○　インクルーシブ教育をすすめていく上で、通常の学級の担任だけでなく、通常の学級の子どもたちにも障害をもつ児童生徒とのかかわり方を考えるきっかけをつくることが大切であることが確認された。

○　通級指導教員は、通常の学級担任と特別支援学級担任とのつなぎ役になり、教員間の風通しを良くすることが大切であるという意見が出された。

○　「連携シート」などのアイテムを利用して情報共有することや、特別支援学校の教員などと連携することでさまざまな視点から児童生徒を把握することが大切であることが確認された。

●　個々の児童生徒の得意にもとづいたきめ細かな自立活動の必要であることが確認された。

●　ICT 機器を活用した、教科の指導向上や障害による学習上および生活上の困難さの克服、子どもの実態などを考慮することが共有された。

●　人とのかかわりについての多様な実践を行っていく必要があることが確認された。

●　キャリア形成や自己理解につながるキャリア教育のさらなる実践が必要であるという意見が出された。